

繪本通俗排悶錄

前篇

四

登

變

1192
4



告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あり
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
其の甚しきに至りてハ挿圖を彩りて却之を宛きのみふらば
塗抹して以て其の何れを解き能はざるも至る者あり
何ぞ其れ思はざる其甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故よ之を宛がさるも於て頗る
營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於てハ之れハ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿

長門屋主人識

打く機を罷と出ぬ頃ありと嫗浴さるふ胡巖も來と共浴さ浴
嫗曰今日漸婦が室の宿せよと云胡巖入と貞女を犯え
貞女大の呼と人を殺と人を殺と云と杵を以と胡巖を
胡巖怒と走て出ぬ貞女房入と自仆と地臥と泣く其
声一夜絶と明日ぬ成と息絶と暮に至と漸く蘇ぬとと
泣くとどくと死せんとと巖と嫗と事の泄んる成恐と貞女を床足
の執事と守り居と明日諸悪少を召と謝飲と二鼓の比貞女之縛め
鐵錘を以と較む貞女痛堪とどくと何ぞ刃を以と速に殺
傷と一人前んど其頸を刺し一人其腹を刺し又其腰を採り遂に
畢と共小戸を卷くと之を焚んと欲と小戸重くとと拳へくと

遠門
1192

非見録卷之五



卷之三



胡巖汪嫗と
謀く
新娘子
張貞女と
挑む

二

其時火を縦く其室を焚く。鄰里の者火を救えんとく。入来と貞女が尸を蹴く。驚くと死人ありと呼ぶ。諸悪少皆逃行くる。中へ入私の曰我鐵錐を以て婦を刺る。數四せしむ死せざる。死人の死し難き。斯の如しと云々。貞女死せる時年十九。明の嘉靖二十三年五月十六日あり。官小女奴及諸悪少を召て鞠はさる。時女奴悪少を指さし。曰是某と云者吾姉を縛り此某推を以て敷て。某刃を以て刺せりと云。入嫗悪少を罵て曰吾汝等。負うる女奴。婦を殺さる咎あり。と云。吾を欺る。然るも今斯ある。何如と云。腹こそり。嫗つひ悪少等の尋ぐ獄死し。けり。貞女生。ま。つ。死。貌。よ。い。姑。の。奉。と。甚。謹。め。可。責。め。た。少。も。怒。る。言。然

云へども。姑が悪を及ぼし。及と獨亢然と。白刃を踏と。喘ぎ。賢あ。ら。う。ご。う。ん。や。此。嘉。定。縣。村。の。故。列。婦。祠。あり。貞。女。死。せ。る。前。二。日。祠。の。旁。の。人。皆。空。中。鼓。樂。の。声。あり。又。祠。中。の。火。炎。と。と。七。柱。中。へ。ま。さ。り。と。あ。ん。是。正。く。貞。女。死。し。と。神。と。あ。る。處。の。徴。と。と。人。云。々。と。云。や。

許烈婦

烈婦許氏の名を長姑とのひたり。東流書邨地の入る。父の正初と云と農人あり。長姑幼く。大義に通。言。夫。を。程。す。く。せ。り。年。十八。あり。城。西。地。あり。汪。氏。の。婦。と。あ。る。也。邑。豪。歐。陽。建。と。云。者。素。よ。り。其。姑。と。通。し。居。る。長。姑。を。こ。ん。と。姑。の。如。く。私。の。通。せ。を。

想^{おも}ふ。数^す月^{げつ}公^{こう}の掛^かへりて。折^せも無^なりたる。ある夕^{ゆふ}暮^{くれ}姑^こ豪^{ごう}成^{せい}。
 妹^いの坐^まちを。豪^{ごう}長^{ちやう}姑^こが浴^{よく}せる衣^いを解^いゆる。長^{ちやう}姑^こ乃^{すなは}衣^い襟^{きん}。
 姑^こ声^{こゑ}を擧^あげ。拒^かはる。豪^{ごう}惧^{おそ}む。必^{かな}ずと云^いふ。或^{ある}勸^{すす}慰^{なぐさ}む。公^{こう}の命^{いのち}。
 其^{その}夜^よ長^{ちやう}姑^こ自^{みづか}室^{むろ}の中^{なか}の縊^くして。死^しせる。康^{かう}熙^し四^し十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}七^{しち}月^{げつ}五^ご日^{にち}ある。此^{この}。
 吏^し官^{くわん}の訟^{そう}る。邊^{へん}邑^いの宰^{さい}。他^たの時^{とき}。例^{れい}して。旁^{たがひ}邑^いの請^{こゝろ}。
 代^{たがひ}と。驗^{けん}せしむ。建^{けん}德^{とく}表^{ひょう}公^{こう}と云^いふ。至^{いた}る。此^{この}時^{とき}早^{はや}六^{りく}日^{にち}を過^する。穢^せ臭^{くさ}。
 を辟^さかん為^{ため}の驗^{けん}者^{しや}。先^{まづ}之^の香^{かう}を焚^たく。俟^{まち}り表^{ひょう}公^{こう}至^{いた}る。異^い香^{かう}空^{くう}中^{ちゆう}。
 生^なるが如^{ごと}く。衣^い履^りよく整^とへり。表^{ひょう}公^{こう}驚^{おどろ}かす。縊^く痕^{こん}を驗^{けん}て命^{いのち}。

い。安^{やす}の動^{うご}き。唯^{ただ}内^{うち}済^{さい}ふ。其^{その}事^{こと}をえ。列^{れつ}婦^ふ然^{ぜん}。
 郊^{きやう}北^{きた}地^ちの殯^{いん}せり。十^{じゅう}餘^{じゆ}年^{ねん}の後^{のち}。至^{いた}る。汪^{わう}荆^{しやう}門^{もん}と云^いふ。委^い此^{この}吏^しを
 聞^きく。あやふ。乾^{けん}隆^{りゆう}年^{ねん}丁^{てい}丑^{しう}の年^{ねん}。邑^い宰^{さい}持^{もち}公^{こう}志^しを編^あむ。時^{とき}北^{きた}城^{じやう}の
 公^{こう}署^{しよ}めく事^{こと}を同^{どう}する者^{もの}。命^{いのち}と云^いふ。各^{おの}の各^{おの}の牙^がを書^かく。邑^い志^しの入^いる。
 とする時^{とき}汪^{わう}荆^{しやう}門^{もん}先^{まづ}長^{ちやう}姑^こが。入^いる。目^めを書^かく。辟^さの粘^{ねん}置^ち。
 ける。歳^{さい}暮^{くれ}のち。同^{どう}詣^ぎ者^{もの}と偕^いに帰^{かへ}らん。此^{この}時^{とき}長^{ちやう}姑^こが事^{こと}の筆^{ひつ}。
 を採^とらむ。夕^{ゆふ}の賤^{せん}を館^{くわん}中^{ちゆう}の設^せく。相^あ聚^{あつ}む。酒^{しゆ}飲^{いん}居^くる。忽^{たち}に異^い香^{かう}薰^{くん}を
 鼻^{はな}を撲^うり。空^{くう}の老^{らう}る。書^か生^{せい}あむ。親^{おや}長^{ちやう}姑^こが死^しせる。是^{こゝ}其^{その}魂^{たま}魄^{はく}此^{この}の
 けり。その人^{ひと}の曰^いふ。當^{あた}年^{ねん}許^{もと}長^{ちやう}姑^こが死^しせる。後^{のち}香^{かう}氣^き斯^{ごと}の如^{ごと}く。是^{こゝ}其^{その}魂^{たま}魄^{はく}此^{この}の

来まらる。と云入言い。畢らざる。大風起。一ツの紙をひらぐ。と
席上落しぬ。え。長姑。題目。書と粘。置。答。傳
け。空中。入替。煉。汪荆門。燭を秉。立。長姑。傳
を書。邑志の中。入。別。と。ぞ。帰。る。

二 烈

烈婦ハ盧氏。夫ハ李祐。如阜地。閻師。凶年。役。避て
四方。行。營。僕。虞。國。の産。便。思。虞。来。金
淫。入。牙。住。酒。四隣。の者。進。周進貴。云。者。方。入
を。周進貴。心中。怒。と。居。又。此。所。海。豪。の張島。と云
者。李兵憲。龍。を。枯。者。民。と。為。海。上。の。威。を。振。周進

貴ハ張島。義児。周進貴。祐。妻。の艶。衣。を。庭。曝。
居。純。綺。の。衣。を。現。張島。の。性。と。説。曰。里。中。の。客。盜
の。如。阜。地。よ。来。蔵。物。且。婦。女。艶。と。告。張島。喜
と。牙。と。頼。め。周洋。と。云。者。と。謀。衆。を。統。李祐。が。家。眷。を。捕。其
家財。を。籍。と。家。人。悉。縛。ら。周洋。が。別。室。の。繫。と。占。と。寛
ら。と。蹄。ぶ。声。天。の。響。を。列。婦。及。女。を。周洋。が。寢。所。入。を
置。周洋。を。諷。云。め。曰。汝。が。夫。の。生。死。ハ。吾。黨。の。内。在。
吾。黨。の。言。所。從。生。也。然。ら。ん。を。且。暮。獄。中。死。せ。ん。母。と。女。と
何。の。逃。と。往。ん。や。と。入。烈。婦。聞。泣。と。私。女。と。計。曰。父。ハ。烈。士。也。何
ぞ。我。姿。を。以。て。禍。を。賈。ん。や。我。孀。婦。也。い。く。數。三。の。兇。を。抗。ん。や。早。く

自裁をうり。汝が父の謝せんや。然る父も囚を解さるるを
女も然りと答へぬ。盧氏、刃を往ぬ。庖刀ありて、竊ひて、
還す。夜ありて守る者の睡るを成す。女も命を自害とせ
る。喉の声おろろくと響けり。守者目を覚め、盧氏給と、
声ぞと入。暫程を過し、同じく自刃を成す。體戦と物音し、
守者躍起と、燭を取ると、二人の尸血の染まると、
告ぐ。周洋秘し、李祐の知らぬ。二人が尸を昇せり。松香黄椒
を雜へ、人せり。叢篁の中ゆく焚せり。杖李祐を、引立行
き。妻を過り、兵憲の所に至り、も、贓物あり依り、兵憲へ受
けり。張島周洋と計り、曰。其妻を燼と、今李祐を放遣ら。禍を遺

まのり。此と江の沈め、禍の根を断る。と云く、繫と、江に投入る。蒼頭
の命助る。道は去る。後の烈婦が父老儒江を渡り、女の行方
を尋る。跡跡無き。哭て、張島烈婦及女を燼。又
李祐を江に沈めぬ。時の人憤り、怒り。誰か其奸を訴る者ありん
と、年を経、張島馬加民、金匠橋の繫を、馬怒と
我命一つ、捨て、萬人の怨を報ん。と云く、張島が不法の事を書す。
京口へ走往し、直指、名陳蕙が前、訟ふ。然と共、二烈が事を遺せり。陳
表、拒く内、心を察し、見らぬ。吳の寔を得り。馬が陳る所と、將
節を合せ、即有司の命、島を縛り来らる。と云く、曰。汝が髪
を、權共、汝が罪の數、足らぬ。何ぞ、白状せると責む。時の張島、傍

非島録卷之三

之を促し責る者多し如く。烈を害せる者多し。陳惠駭て曰。是
 天の汝が惡を顕せる者多し。遂に張島と法の如く行ふ。二烈が遺
 骨を求と葬らんとせしむ。周進貴已先疫と病と死せしむ。
 周洋一入網を漏る魚の如くあり。二五年をわたり。又横ざまあり。
 事を行々せしむ。民周洋が舊惡を卷く。顔孟令顔と小訴ふ。今日吾秀才
 一り。時官と名を秀才の如く。如泉の二烈が成聞と。虐賊共が奸肉を食
 ひ其皮を寝んと欲し。つれづれに想へども餘黨いまだ残どりとあり。立
 ちて之を法に行ひしむ。是れ先師の御史ある世廟の天子の夏聞えん
 心。有司の詔し。二烈の祠を立。春秋の少牢を以て祀す。牛羊豕を供祭
 祭を供す。玉ひたり。馮令汝躬が輓の詩曰。輓の棺を乗せし車をひく時朋友
 を少牢と云ふ。

違魚腹綱常在節頭鳥臺日月懸の句。今に至りても傳へて人
 誦と云ふ。

張烈婦

烈婦ハ荀氏あり。父の名ハ中益と云ふ。考城地ハ寧陵地也。
 柳河地の張鐸の嫁せしむ。張鐸世々農家あり。父亡し獨母のそむむ。
 烈婦裁縫を勤め。姑の事するのを謹める。其鄰ハ韓可元と云ふ者あり。
 素衣を無頼策點の徒めしむ。里中を横行せしむ。烈婦母の家より歸り
 来くと云ふ。姑將西夢を箔上の置と。盒を覆へば置く。故を
 問ふ。姑曰。夢者天と熟し。一る時折ふ。客のわをこむ。汝が夫を呼て
 覆とせんとと思つと。未歸来をせし故。其儘めくむと云ふ。烈婦

衣飾を易む。遠め門を出。蜀林の葉を采と。夢を覆つんと。畑め入
 たる。此門外數百歩。即張鐸が田地なる。此時可元烈婦が林叢め入る
 を窺ふ。王壁と云者を呼く。偕め園中め入る。此王壁も同く與頼子
 少く。年少く。貌好る。可元私に計る。婦人王壁を見を
 必悦と隨べし。我其を言さ。めしと付入らん。他月せざる理ありと
 斯計らひし。烈婦王壁が林叢め入来し。成えと駭き。避く。何と
 う為ると向ふ。王壁急ぐ。近く寄く抱んと。可元私に計る。婦人王壁を見を
 と救へと呼ぶ。王壁其口を押さ。言へし。可元前より抱え。赫しく曰
 従ふん。汝と殺さん。烈婦曰。願へん。殺せ。王壁曰。従ふん。勤死さん。烈婦
 曰。戸を全くせん。猶さう好。貞妻を殺さん。誓言く。汝も従へしと云ふ。強く

犯さんとす。可元が頬をひ。以て撃く。其裾を碎く。可元烈婦が成
 引折れ。のち足と以て抵む。兩人烈婦が髪を粹く。付せ。付せ。復
 起く。再付す。又起り。髪亂れ。地め落る。至る。兩人力を極く。偏と
 共犯と。瓜得む。衣の條々。裂ぬ。可元舎と云んとす。成王壁後日の難
 わん。と云く。遂に縊死。頭の綱を。樹の藪系。置る。烈婦死せんと
 する時。苦み。足ゆく。地を抓る。坎の如く。跡つる。血溜る。兩人
 尚悪し。と想ふ。林の本を。陰戸め。入深く。打こ。首飾指環を
 奪と。急と。逃往る。此時康熙己巳二十七年五月廿三日。夫張
 鐸。くる。夢。知らず。家め。歸る。姑門。在。婦の。久。歸ら
 ざる。不審く。張鐸め。疾往。と看。と云。張鐸往。と。畑。樹。め。駭。て

死居々々。大ぬ孩村人を呼々る。皆集来々。悼め共其故を。知者卒。張鐸為ぶ。方無く。指を買々。尸を収め。葬送を為ん。と。初め可元林中。よむ。かろる時。適張光彩と云者。小遇つ。光彩。柳河の人。可元。衣引裂。血の付。房。俣。ゆく。走。往。さ。小。闘。負。者。小。似。る。光彩。私。怪。む。韓十。素。を。横道。を。ろ。人。小。讓。る。の。を。今日。い。ふ。一。と。斯。か。ま。取。一。と。思。ひ。ろ。可元。兄。弟。多。あり。韓。行。十。人。め。る。と。心。韓。十。と。人。呼。々。る。光彩。烈。婦。が。變。を。聞。と。心。小。可元。が。所。為。る。を。知。す。私。小。其。妻。小。語。す。と。妻。唾。吐。一。と。曰。韓。十。小。惡。人。る。を。天命。盡。と。自。斃。且。ん。と。汝。韓。十。を。畏。且。と。言。へ。ど。死。せ。る。者。知。る。の。わ。ば。必。厲。鬼。と。為。と。汝。小。禍。せん。と。云。と。犯。と。自。往。ん。と。光彩。悞。且。且。慚。と。直。小。走。て。

張鐸が家の往々。一。次第。を。語。願。々。の。證。人。と。為。ら。ん。と。云。張。鐸。此。の。於。可元。を。官。小。訟。可元。使。小。賄。一。と。其。獄。を。緩。く。と。六月。二十。二。日。小。至。と。始。と。往。と。尸。を。驗。む。烈。婦。死。一。と。匝。月。小。ち。ま。り。然。る。小。棺。を。啟。と。視。る。小。面。生。る。が。如。く。肢。体。血。斑。鮮。小。見。也。こ。ま。枝。掖。が。小。僵。ち。が。り。立。て。る。衆。皆。驚。異。む。件。人。盡。其。傷。を。隠。一。と。云。頭。の。繩。の。痕。小。又。せ。ど。蓋。人。の。勒。死。せ。る。小。繩。痕。交。と。今。交。せ。る。小。自。縊。一。小。違。ど。と。申。と。令。其。言。小。惑。ひ。張。鐸。が。証。ち。ろ。ん。と。云。小。觀。者。大。小。誹。く。言。ふ。今。公。動。さ。と。衆。を。散。せ。し。め。と。曰。明日。更。小。此。を。鞠。え。ん。と。其。日。小。府。小。歸。て。ね。翌。立。日。取。衣。て。觀。る。者。益。多。く。役。所。の。前。小。充。滿。と。乃。城。隍。廟。小。於。と。鞠。と。午。人。申。と。言。昨日。の。如。し。扛。尸。夫。小。張。九。容。と。云。者。あ。り。前。知。と。件。人。を。叱。と。曰。韓。十。私。小。我。



可元王壁等
 林叢に張烈
 婦を縊死し
 之柳河村に
 關之

非目録卷之三



持世金卷之三

十四

曲目的金を遺^すまり。汝若干を得^てと斯諱^く真と云^ふと云^ふ此^ハ可元
 始^メ小賄^を與^る時^ニ張九容獨受^ずり^テ故^ハ然^らし^る也^{ナリ}。件人此時返^させ^り
 語^を。今^ハ已^ニ事^を得^ば薄^し此^を責^む。衆憤^しと^り件人^を梓^へ釋^すと^り
 毆^つと斃^{さん}と^も可元既^ハ魄^神の奪^はれ^り又^ハ衆^人の怒^る声^を聞^く。免^れ
 是^が一^と知^る。具^ハ烈^婦と殺^せる^状を述^べと^り曰^ふ林^を押^さつ^て人^徒ハ
 ざる^ハ憤^とる^也。首^飾指^環と掠^つる^ハ本^意を遂^げ貨^を取^り胸^を暗^く
 せ^りと申^せ。隸^ハ仰^せせ^り可元^ハ家^を索^めし^て果^しと^り首^飾指^環
 具^ハ在^る乃^ハ可元^ハ王^壁と収^め獄^に下^す。元^罪未^ニ定^まる^也と^り。幾^も
 ち^と二^人た^ふ相^繼ぐ^獄中^にゆ^り斃^失る^也。此^邑烈^婦祠^{あり}。黃^喬
 の二^婦黃^氏と喬^氏と祀^まる^也。此^張氏^黃喬^小劣^るを^とり^てと^り人^毎小^嘆賞^す

せざる者無^くなり

鄭氏

康熙^{二十五年}。閩^名の唐^嶼鎮^名地^{あり}。書^生林^國奎^ガ妻^鄭氏^ハ夫^死
 して後^節を守^りと^り夫^の弟^ハ文^芳と^云者^{あり}と^り言^ふ出^し
 して挑^める^也。鄭^氏怒^り左^の耳^を割^りと^り宗^老ハ告^ぐる^也。此^を咎^むる^也
 其^後入^り謾^言と^り書^きと^り其^子の書^篋の中^に投^入せ^りと^り鄭^氏大^に
 怒^りと^り又^ハ右^の耳^を割^りと^り鄭^氏父^煥と^云者^{あり}官^に出^しと^り訟^をす^也。中^丞
 官^永登^言親^轅門^を置^くと^り門^を閉^じと^り鄭^氏を^とり^て鞫^す一^王ハ觀^る者^數千^人
 あり。文^芳を重^く杖^柳と^り加^へと^りつ^て觀^る者^感服^しと^り快^し
 と^り時^夏なりと^り旱^續と^り此^日大^に雨^降出^ぬ鄭^氏が雙^耳復^す

生トく初の如し。蓋天奇節を顕し玉ふるる處。古今例無事と云ふ。

嶽賈妻妾

甲申三月。閩賊團を起す。明の京城を破る時。嶽賈殺肆成守。妻と妾と共謀。砒霜酒を飲と死せんと云。入時二賊入来。夫天井の上小躲。賊二人の女を膝抱。樂む妻毒酒と大碗小斟。自飲。賊笑と。蓋我と共小醉。妻答へ。妾意を解。二の碗小酒と。盛と賊小進。琵琶と取。彈々。伯々。二賊飲。死と妻も亦倒。夫急下。来と。羊を殺。血を取。妻の口小灌。先小傾。故。

酒毒尚輕く。活入。二賊の戸を抱。後の河沈め。門を閉。静の避往。竟め危難を免。林氏

林氏

濟南地。戚安期と云。人素。色好。浮き歩。行。妻妬。行を。か。諫。聴。妻。林氏。貌美。賢。明末の時。北兵。境。入。来。林氏。を。保。暮。途。中。宿。此。を。犯。林氏。偽。諾。兵。刀。の。床。頭。在。取。急。刀。を。抽。自。刺。死。兵。林氏。が。尸。を。野。捨。つ。次。日。戚安期。妻。林氏。が。死。せ。生。口。者。戚。悼。往。尸。を。見。微。息。背。負。帰。抱。け。

めかきと。且聲と出ると呻ぬ其項と扶と竹の管り。易樂成
飲せ養ひと。汝萬一能命活らば吾此後好色をけさ。若負ふ
必凶の遺へんと誓言々々。半年を過しと林氏平復しと。故の如くよ
成ぬ戚安期。愛戀よるる昔の逾る。曲巷の遊此を絶と休ま
る。數年立と林氏子無死依と夫の勅と。婢を匡納と王へと
云ふ戚が曰誓言前め在。鬼神豈聞と。らんや子孫の断せん命なり。
汝老る身非秘。行末子も計る。と云と承引。林氏身の疾。托と夫を別の室。臥さる。婢の海棠と云。昔の教
と。夫の林下の臥さる。既久く。陰の婢の語と。夫の汝が所來と
寝玉ひやと問。婢然る。と答ふ林氏信とせ。と云と夜。婢を

被處の遺らむ。自往と夫の床の登。と夫目醒と誰ぞと問。林
氏耳の口を寄と。我の海棠と云と云。戚が曰我妻と誓言。一更有と
敢と更と。若昔の心さる。汝が斯來ぬ。我待と。と云と拒と容。林氏
聞と。我室へ入と臥ぬ。此と戚狐眠と。林氏又婢
め云含めと。自の姿と。夫が床に就と。戚念と。我妻平生
自進と。被中へ入ると無と。疑ひと其項と摸。と痕あり。是
婢と知と床を。婢の慚と退。夜明と林氏語て。
速に婢を外へ嫁せ。めんと言ふ林氏咲と。曰君余公強。倘男子を
儲る幸甚。と云と戚が曰盟誓言。背を。鬼神の責身。及ん
争宗嗣と續くる。と云と聽と。翼日林氏笑と。夫め語と。曰

凡農家ゆく種を播育常例ありて違へべきこと。今夜耕耨の期
 至りぬと云ふ戚笑と其意を解と既の日暮と林氏燭を滅し婢
 を呼と己が衾の中臥さむ戚へ知らざりて榻の登りて戯まて曰
 佃人至るや我錢鏹の利をばどしと此良田の負くを愧といへ婢つ
 る物言へどし居りて事已と婢偽と弱の記往と林氏を以て易
 しむ以後の婢が經行の終まる度事ありも斯の如くしる夫の如
 けりて我をばどしと婢が腹大なる成るをば林氏常の静
 む坐せりぬぬ業をさせどと夫の語やとる婢を室に入ん
 支を勧つと共君聽し玉の若君悞と我ありと婢と寝
 玉の婢子とて彼といふ玉の戚が日子を留と母を養ふと

云ふ林氏聞と答へて月を經と婢一子を産す。林氏暗に乳媪を求
 る。母の家を預て養へ。四五年を經と又一子一女を生じ長子名ハ
 長生已ぬ七歳ある外祖家預て養せん。林氏半月を過ぬ。不
 歸寧を托し往て遇ふ婢年々張と戚時と此と外嫁せりぬと
 促も林氏諾と婢日ぬ兒女を思と逢へんぬ欲と林氏其願を併
 髪と上とさす此と母の家を送と諸らぬ戚向と云海棠が嫁せん
 事を欲せさる。母の家を義男有る。此度此配を成せると云
 半此を過しと子女俱に成長せり。戚初度ぬ値入林氏期ぬ先と
 酒食の用意と。賓友ハ誰とめと問ぬ戚嘆と曰歲月早過と怒
 半世に成ぬ幸ぬ各強健ゆと家事も凍餒ぬ至らぬ。廟所の者ハ

藤下一點のそと云ふ林氏曰君執拗しく妾が言ふ従へど今誰ぞ怨ん
 然且共男子兩人を得んと欲さるも難なるの非ど何ぞ況一人を戚
 笑と曰既難くさると云然らば明日西の男子を索めん林氏易き
 事と云翌日早起と駕を命とく母の家へ至り子女を扱はせ載
 と俱小歸り来と門へ入と雁行せむ子等父を賀しく千秋と呼
 び拜し了と嬉笑と戚敷き怪と解せむ林氏曰君両男を索む妾
 一女を添つと云と始と詳め本末を述べ戚喜と曰何ぞ早く告ごら
 林氏曰早く告る君其母を絶せん今子已戚立せむ尚絶とべらんや
 戚感極くと流自流とぬ乃婢を迎て老を偕めしとるん古賢姫の
 林氏が如死者ハ聖と云べし。

金三妻

崑山地の舟師の楊姓なる者あり。金姓なる者と睦りし。金死して
 一人の男子を遺せむ。名を三とぞ云る。年十七ゆく。妻事甚しくを
 けむ。楊あるは隣と扱舟へ入ると美食の三も力を出しく勤る。大
 小愛し。多り楊夫婦子無し。只若き女一人を持て。因て三が妻と
 歳を越と三疾の深く疾が漸と羸とさるが危たか至り。楊夫婦
 始と悔と罵辱しめと止まら。一日江の舟を出一孤島の
 下泊し。三の命とく島の下下と薪を拾はせ。帰らざる間帆を挂と
 去りぬ。三薪を采と岸へ来と見る舟を痛哭し。江へ赴と死
 らんとせし。又念ひ返しく此島の中若入ぬ。冀と救ひ来むべしと。

足は任せとく往くも林の中へ入ると一所の至りたる大なる窟七八
 わり何の故の斯る物を深林の中へ入置けりてん恐らくは盗の劫せり
 所の財物一と。暫く此地に蔵せりて思ふ。又工賃を出しと臨む。
 舟其處を過るあり。之を召て招くと曰。我の行李あり。伴を待共至ら
 我を舟に乗せとく去ると云ふ。舟中の者許し諾む。之彼大窟を舟へ
 入と行く儀真地名に抵り。人の家へ宿し。密に窟を放と視む。皆金
 珠あり。其地へ即と若干を售りて。此より腹食。起居故を非ど。童
 僕を収へ。妾を買と。富家の主とるなり。一日舟中へ河を過る。揚が舟
 在り。之を召て。我識と共揚へ知らむ。三人を遣と。其舟を雇へり。胡
 襄地の賈輜重多く在り。是より先揚。之を棄し。時女晝夜啼

哭しと。生きんる。我欲せむ。父母の是れ強と。更れ婿を納む。と云ふ。是れ
 女従へむ。今日之が舟へ登りて来り。我見と。人皆伏しと。仰ぎ見る者
 一。女竊め視と。驚と。母の語と曰。客の状吾婿に似る。母と我言
 と。之が如き死せる所を知らむと。女再言へむ。之女を願と。伴て
 舟へ入。智と曰。何ぞ船尾に破帖を載と。載と。と云ふ。是れハ之が
 宴時。初と。揚が舟へ登る時。揚が斯言し。是れ於と。妻も初と。覺
 ず。之と。相見ゆ。之。驩ぶる。平生の如し。楊夫婦羅拜しと。罪を請ひ。過
 を悔と。止む。其より。舅姑女を挈と。家へ誘歸と。養たり。其後
 劉六劉七と云者。叛と。呉へ入。之。金帛を出しと。戦士と。募り
 求め。郡の別駕。官。胡公。諸侯。に従と。直に狼山の穴を搗き。其。木料を

嘉興地ろ係張天成と云者ハ秀水縣名の使督也。云考の雜職ありて、盜賊を積り家と起し。權を恣りて、郷里の人を害ふ故に里人目を側と恐るる也。康熙三十年賊犯の獄に入る也。天成刑書に「捕役の者賊の婦をも拘へ引來ぬ天成盜婦の美あるを以て力と之を釋さん」と。盜をもこの刑を用ざると獄に入る置り。叔私に盜婦と通姦し。日久くして此を娶んと欲し。獄卒ハ銀代與て夫の盜を獄中ハ斃させたり。叔さやめぐ計りて。竟ハ彼婦を取て妾とす。りたり。盜婦と女とのり。年十二三ハ成ぬ。天成も妻と喪て子無く。螟蛉の子方姓ある者と子と有り居る也。其女と許しと妻と有り。此女年長ぶるハ適く美るる也。天成又之を欲せん。と欲し。方姓が

告白

凡そ此の卷中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あれば或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し其の甚しきに至りてハ挿圖を彩りて却之を宛るのみならず塗抹して以て其の何れもを解き能いざるハも至る者あり何ぞ其れ思はざる。甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し以て業とあり所のものなり故に之を宛るるもふ於てハ頗る營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於てハ之れハ償金を要せざる可らば仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿

長門屋主人識

